本学における海外研修の変遷と今後の課題

Transition and challenges for the future of overseas study tour in Uekusa-Gakuen Junior College

古川　繁子　　松原　敬子　　相磯　友子

要旨：本報告は、海外研修委員会から国際交流委員会へと名称が変更したことをきっかけとして、今後の国際交流委員会の活動方向を検討することを目的としたものである。そこで、植草学園短期大学の海外研修と植草幼児教育専門学校の海外修学旅行がどのように始まり、いかに変遷してきたのかを概観する。併せて本学学生の海外研修に対する意識調査の結果から、今後の課題を明らかにすることを目指した。その結果、本学における海外研修の今後の課題として、少人数でも実施可能な海外研修の仕組みづくり、日本の国際化に目を向ける視点を取り入れることが挙げられた。学内で国際化を学ぶ仕組みとして、海外で活躍する講師等を招聘して講演会活動を年間計画に位置づけていくことが考えられた。

Key Words　国際交流　海外研修　意識調査　教育理念　国際化

Ⅰ．はじめに

植草学園短期大学「国際交流委員会」という名称での委員会活動は今年度・平成 20 年度 4 月からである。それ以前は、平成 12 年度より「海外研修委員会」という名称での委員会活動であった。今年度 4 月、植草学園大学が開学した際に、大学での校務分掌名称に合わせての名称変更である。

過去の、本短期大学での「海外研修委員会」としての実績は、毎年 3 月に行われる海外研修旅行の企画・参加学生への指導・研修後の報告書作成および、大学祭で研修内容を公表するというものがほとんどであった。

第１回海外研修旅行から現在までの研修先および参加人員等概略は次章にて報告する通りである。

今年度当初から、委員会活動の課題は以下のようなものであった。

１）「国際交流委員会」の活動内容の明確化

２）海外研修旅行の企画にあたっての内容の検討

３）「短期大学国際交流委員会活動規定」の作成

課題１）については、海外研修という単一な活動にとどまらず、短期大学としての国際交流の意義とあり方を定めていくことである。

課題２）については、前年度の海外研修旅行は、参加人数の減少から企画の中止に至っている。海外研修の在り方を魅力あるものへと再考していく必要がある。また、３）を課題とした理由は、短期大学としての活動内容を明確にするために、国際交流委員会規定を、作成する必要が感じられたからである。

上記のような課題を感じつつ、課題解決に向け、今年度の活動方針を設定した。
活動方針に基づいて活動してきた結果の報告に加え、今後の国際交流委員会の活動方向を検討していく資料として行くために、本報告は、ⅠとⅡ(1)、Ⅲを古川が、Ⅱ(２)とⅣ(２)を松原が、Ⅳ(１)を相磯が執筆分担し、Ⅴは 3 名で協議してまとめた。また、本報告をまとめるに際して、教務課斉藤氏より 2008 年度植草学園短期大学国際交流委員会会議録及び活動記録の資料提供を受けた。

本報告にまとまるまでに、活動を支え陰に日向に多くの方々のご支援をいただいた。紙面をお借りしてお礼を申し上げたい。

Ⅱ．植草学園での国際交流活動の考証

（1）植草学園短期大学における海外研修 [1)]

第１回：オーストラリア（シドニー・メルボルン）

2001 年 3 月 10 日（土）～3 月 16 日（金）（6 泊 7 日、内機内泊 2 日）

団長を山田純子教授としてほかに引率教員 3 名、参加学生 34 名、近畿日本ツーリスト添乗員 2 名の総勢 40 名

研修内容（訪問先４ヵ所、講義等２回、市内研修見学２日）

報告集より　『この計画は植草昭理事長と荒井昭雄学長お二人の「学生が海外の福祉に触れることが将来の福祉を担う人として大変意義がある」という熱い思いから始まりました。』

また、報告集は事前打ち合わせのために現地に赴き施設の視察を行い、『帰国後も E メールで現地コーディネーターと意見交換をし、出発数日前に送られてきた講義概要を大急ぎで手分けして翻訳し・・・』とある。その他研修旅行に至るまでの準備・研修中のアンケート・帰国後の報告書まとめまで、報告書には詳細に記述されている。この研修を報告することで、今回参加できなかったすべての学生に追体験をして学びとしてほしいという意気込みが感じられる。

第２回：スウェーデン・デンマーク・フランス

2003 年 3 月 2 日（日）～3 月 9 日（日）（７泊８日、機内泊２日）

団長；川端真由美教授、引率２名、学生３３名、添乗員２名、総勢３８名

研修内容（訪問先グループ別・専攻別計７か所、講義等２回、市内見学２日半）

第３回：オーストラリア（メルボルン・シドニー）

2004 年 3 月 2 日（火）～3 月 8 日（月）（６泊７日、機内泊２日）

団長；吉沢教授、引率１名、学生１１名、添乗員１名、総勢１４名

研修内容（施設見学４ヵ所、講義等１回、市内見学２日半）

第４回：ストックホルム・パリ

2005 年 3 月 1 日（火）～3 月 8 日（火）（７泊８日、機内泊２日）

団長；大木みわ教授、引率１名、学生１６名、添乗員１名、総勢１９名

研修内容（訪問先専攻ごとに３か所・計６か所、講義等２回、市内見学２日半）

第５回：デンマーク・イタリア

2006 年 2 月 28 日（火）～3 月 8 日（火）（７泊８日、機内泊２日）

団長；川端真由美教授、引率；１名、学生２９名、添乗員１名、総勢１２名
研修内容（訪問先４ヵ所、講義等２回、市内見学２日半）

第６回：スウェーデン・イギリス
2007 年 3 月 5 日（月）～3 月 12 日（月）（７泊８日、機内泊２日）
団長；古川繁子准教授、学生１３名、添乗員１名、総勢１５名
研修内容（訪問先専攻ごと・合同計３か所、講義等１回、市内見学２日半）

第１回から第６回を通して

１回目から３回目までは、オーストラリアとヨーロッパと訪問先を隔年にしていたが、４回目以降はヨーロッパが主体となった。また、第４回以降はヨーロッパの２カ国とし、第２回のみがヨーロッパ３カ国訪問であった。これらの変遷の中に、７泊８日の旅行で可能な研修の内容が２カ国であることが定着してきた。また、２カ国訪問のうち、１カ国は福祉施設見学等の研修に充てられたが、もう１カ国では現地の都市や生活の見学による、国際感覚の醸成に充てられるようになってきている。

学生参加者数は、１回目・２回目は３４・３３名と多いが５回目の２９名以外は１１・１６・１３名と半数以下となっており、全体ではヨーロッパのほうが参加者が多い傾向であった。年々、諸経費の高騰があり、オイルサーチャージ等もかかるようになった。各回とも引率教員と添乗員は付いていたが、第１回目に比べ、第６回目は一人ずつとなり、少なくなった。

（2）植草幼児教育専門学校における海外修学旅行の変遷

植草幼児教育専門学校における海外修学旅行は、学校全体で取り組む大きな学校行事であった[2)]。

海外修学旅行は、昭和 62 年（1987）に開始され、アフガニスタン戦争の影響で平成 14 年 3 月（2002）に 1 度中止になった以外は、毎年実施された。訪問国は、中華民国（台湾）（8 回）大韓民国（韓国）（2 回）オーストラリア（10 回）と推移して来た。

第１回～第８回　中華民国（台湾）

第 1 回修学旅行の訪問国・訪問地・旅行日程の発案は、植草昭理事長よりなされ、それに基づき引率予定教員により現地の下見実施後、具体的な日程旅行計画が立てられた。

訪問地：中華民国（台湾）
対象学年：1 年生
時期日程：3 月卒業式後 4 泊 5 日
目的：①台湾の幼稚園見学
②台湾の学校訪問（現地学生とペアパートナーになっての交流）
③中華民国（台湾）観光

幼稚園見学・学校訪問については、植草昭理事長と親交のあった許興仁先生（故人光華女

子高級中学校長）のお世話により、台南市の幼稚園数園を分散訪問し、学校は許興仁先生の学校を訪問することとなった。

学校訪問日程：

午前：幼稚園訪問

午後：光華女子高級中学校訪問「交歓会」

夜：　ホテルにて「交流会」ペアパートナー

翌朝：光華女子高級中学校朝礼参加

「交歓会」では、国歌・校歌の交歓から始まり、互いの学校で行っている合唱や創作ダンス等の諸活動を披露することに意義があった。さらに、「交流会」では、宿泊しているホテルに許興仁先生始め諸先生方やパートナーを招待し、夕食を共にしながら歌ったり踊ったりと若さ溢れる活気が会場内に漲っていた。しかし、一夜明けた朝礼では昨晩の賑やかさが一転し、きりりと引き締まったパートナーの変貌振りに度肝を抜かれ、整然とした行進や護身術・鼓笛隊による演技等に目を見張った。まさしく、国情の違いを肌で感じられた。学生のペアパートナーの決め方は、日本から名簿を台湾に送り、その名簿に台湾側のパートナーを記入する方法がとられた。名前しか知らないパートナーの出迎えを受け不安と緊張の中、日本語の通じないパートナーとの意志疎通の難しさに戸惑いながらも徐々に打ち解けていく学生たちの様子は、頼もしい限りだった。

平成 3 年（1991）第 5 回修学旅行は、湾岸戦争の影響を受け、旅行時期を 3 月から 12 月（2 年生）に延期し、第 8 回（1994）までこの時期に実施された。

第 9 回～第 10 回　大韓民国（ソウル）

中華民国（台湾）への修学旅行も許興仁先生の突然の死去により中止となり、第 9 回目からは、旅行時期を 3 月（1 年生）に戻し、大韓民国（韓国）ソウル崇義女子専門大学での「交歓会」及び、ソウル市内幼稚園見学が 2 年間実施された。現在と違い、日本文化の交流が実施されていない 1995 年頃の韓国の対日感情は、台湾と比べると厳しいものがあり、「交流会」の実施は困難であった。

第 11 回～第 20 回　オーストラリア（ゴールドコースト）

第 11 回平成 9 年（1997）より訪問国をオーストラリアとし、第 20 回まで実施した。

台湾・韓国では、学校・幼稚園訪問に費用は掛からなかったが、オーストラリアでは費用が掛かる為に幼稚園訪問のみとなった。ゴールドコーストの藤国際幼稚園の理事長である藤原一昭先生のお世話により、数園に分散訪問することが出来た。

ある幼稚園では、多国籍の２～３歳園児が 24 名、先生は５名で、日本の保育園に当たる。実習をここで行いたいという程、学生は園児とすぐに溶け込み、戯れたり歌ったり時には、園庭で追いかけっこをしたりしてはしゃぎ回った。保育参観後、学生のたどたどしい英語でお礼のスピーチをし、手遊びやお土産のけん玉を実技披露した。そこで、思いもかけず園児から手作りのしおりをプレゼントされた学生たちは、大喜びであった。学生からも手作りの飛び出すカードを園児一人ひとりに手渡した。園児たちは、開いた途端大興奮で、

すかさず先生に見せに駆け寄って行った。この光景に学生たちは、また大感激であった。記念撮影後は、後ろ髪を引かれる思いで幼稚園を後にした。 オーストラリアの広大な大地と緑豊かで赤い屋根やレンガの街並みは、大きな感動と夢を抱かせてくれた。

バブル経済の崩壊、戦争、テロ等の社会情勢に影響されながらも継続した修学旅行であったが、何も変わらなかったのは、子どもたちと接する学生の笑顔であった。

人種・国籍・言語等の違いに戸惑いながらも過ごした数日間は、学生たちにとってかけがえのない貴重な体験となったに違いない。

理事長の海外修学旅行への思い

私は、植草幼児教育専門学校の海外における修学旅行の引率を第 6 回平成 4 年（1992）～最終となった第 20 回平成 19 年（2007）までさせていただいた。この 15 回の引率経験の中で言えることは、第一に理事長植草昭先生の学生に海外経験をさせたいという熱い情熱である。修学旅行のしおり「実施にあたり」にも書かれているように理事長先生の豊かな国際感覚が、20 回にも及ぶ海外における修学旅行の実施という形になり実を結んできた。実施に当たっては、理事長先生自ら企画から事前の下見等、精力的なお骨折りのもと入念な計画が立案されていた。理事長先生のこの熱い思いがなければ、海外における修学旅行は恐らく成立していなかったであろう。

海外修学旅行の引率を振り返って

本学において当初、私は国際交流委員ではなかったが、本年度の研修先がオーストラリア・ゴールドコーストに予定されたことから活動に参加させていただくことになった。そして、今回、植草幼児教育専門学校の海外における修学旅行をこのような形で紀要にまとめることが出来、非常に感慨深いものである。

さらに、第 16 回平成 15 年（2003）の修学旅行に参加した卒業生の F さんが昨年（2008）の 11 月にゴールドコーストに 1 年間のワーキングホリデーに旅立ったのである。2003 年は、イラク戦争の影響で前年に引き続き実施が危ぶまれたが、37 名と最小人数で催行した年である。この時に訪れた藤国際幼稚園に訪問したことがきっかけで、またこの地を訪れたいという思いを 5 年後に実現させたのである。この原稿を書いている 1 月には、F さんから手紙と写真が送られて来た。4 年間の幼稚園教諭経験を活かし、保育園でのボランティアも積極的に行っている。

F さんからの手紙を抜粋する。『保育内容は、基本的なところは日本と同じですが、やはりスタイルが全く違い驚きの連続でした。（中略）私も毎日先生たちのアイディアいっぱいの保育に参加して、とても楽しめました。私自身も折り紙や日本の手遊び、歌などを紹介させてもらい、子どもたちと一緒に行いとても喜んでくれて言葉は通じなくても保育が出来るということが嬉しかったです。』さらに、F さんは念願であった藤国際幼稚園の藤原先生をお訪ねし、海外生活においての貴重なアドバイスや「いつでもボランテイアに来て下さい。」というお言葉をいただき、F さんの夢はまだまだ続いていくであろう。国際交流委員会として発足した年に卒業生の活躍は、嬉しい限りであった。

21 世紀を担う子どもたちの保育者として巣立って行った卒業生の胸には、たくさんの

思い出と共にこの貴重な経験が大きな軌跡となって刻まれていくと確信する。そして、私たちにも今後に繋がる示唆を与えてくれたのである。

表 1　植草幼児教育専門学校修学旅行経過記録

回数	期　　日		学生数	訪　問　地
第 1回	昭和62年（1987年）	3/15～19	149名	台北・台南・高雄
第 2回	昭和63年（1988年）	3/14～18	142名	高雄・台南・台北
第 3回	平成元年（1989年）	3/14～18	112名	高雄・台南・台北
第 4回	平成 2年（1990年）	3/14～18	134名	高雄・台南・台北
第 5回	平成 3年（1991年）	12/15～19	107名	高雄・台南・台北
第 6回	平成 4年（1992年）	12/13～17	117名	高雄・台南・台北
第 7回	平成 5年（1993年）	12/12～16	124名	高雄・台南・台北
第 8回	平成 6年（1994年）	12/11～15	110名	台中・台北
第 9回	平成 7年（1995年）	3/15～18	114名	ソウル
第10回	平成 8年（1996年）	3/13～16	129名	ソウル
第11回	平成 9年（1997年）	3/13～17	114名	シドニー
第12回	平成10年（1998年）	3/14～18	98名	ゴルドコースト・シドニー
第13回	平成11年（1999年）	3/15～19	113名	ゴルドコースト・シドニー
第14回	平成12年（2000年）	3/14～18	84名	ゴルドコースト・シドニー
第15回	平成13年（2001年）	3/13～17	114名	ゴルドコースト・シドニー
第16回	平成15年（2003年）	3/12～16	37名	ゴルドコースト・シドニー
第17回	平成16年（2004年）	3/13～17	54名	ゴルドコースト・シドニー
第18回	平成17年（2005年）	3/13～17	65名	ゴルドコースト・シドニー
第19回	平成18年（2006年）	3/14～19	38名	ゴルドコースト・シドニー
第20回	平成19年（2007年）	3/13～18	32名	ゴルドコースト・シドニー

表 2　第 20 回修学旅行のしおりより

実施にあたり

理事長　植草　昭

私は、昭和 36 年（1961 年）の秋に 43 日間の欧米の旅をしてそれ以来人生観が変わりました。

若い時に海外体験をすることで人生を大きく変えることがあります。特に幼児教育者になる皆さんが 2 カ年という学生生活中、外国の幼稚園を訪問し、外国語（英語）で園児と触れ合うことは素晴らしい体験になるはずです。さらに英語力のある先生がこれから重要となります。

オリンピックを開催したオーストラリア（AUSTRALIA）シドニー（SYDNEY）を訪問することも意義深いものがあります。日本からシドニーまで（9 時間 30 分位）赤道を越え、南半球への 7,774km の旅であります。幼稚園訪問地は、ゴールドコースト（GOLD COAST）、オーストラリア最大のリゾート地、42km にわたる黄金色のビーチがあります。楽しみながら色々と学んでください。

今回第 20 回目の修学旅行となりますが、今までは、中華民国の光華女子高級中学（保育科）と幼稚園、そして大韓民国の崇義女性専門大学（幼児教育科）と幼稚園を、そしてこの度行うオーストラリアの幼稚園を訪問します。

先輩たちが築いたこの行事を、更により良い成果をあげてほしいと希望します。外国の旅でありますので、安全を第一に皆がお互いに協力し有意義な旅にしてください。

皆さんの今後の教育活動に大きなプラスになることを願ってやみません。

Hope your dream come true.

Ⅲ．国際交流・海外研修の傾向

短大教育の中で、あるいは千葉県という環境の中で、国際交流・海外研修の流れが変化してきていることを感じる。今年一年間で触れえた情報をまとめた。

(1) 「平成 19 年度　短期大学における特色ある優れた取り組み報告」における国際交流の取組

どの取り組みも､教育理念との強い関連から国際交流の取組がされていることがわかる。単なる国際交流にとどまらず、教育の一環として単位化し、大学全体ひいては地域との協力をあげての取り組みである。

①京都経済短期大学（新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム）[3)]

京都経済短期大学は開学当初から全学生の 2 割を留学生と定め､留学生の力を借りて｢学内における国際化｣を推進している。それは、21 世紀の国際社会で活躍できる産業人の育成を目指し、経営情報の取得とともに、他国の文化や習慣を育む必要があるからである。そのために取り組んだ主な活動は、留学生による語学講座、国際交流講演会とシンポジウム、SA（Student　Assistant）留学生の正課科目「日本語」の講義に在日外国人学生が会話相手として参加する、けいたん留学生交流会。学生支援 GP 採択後に発展させた活動に「けいたん留学生交流会」を年 1 回から 2 か月に一回開催。内容も、留学生母国の文化紹介が中心であったが、経営学・情報学・語学をテーマに盛り込み、専門分野と国際交流双方の理解を多面的にしていくように発展。国際相談室新設。HP 国際交流サイト、ネパール教育支援活動の発展。最後に、本プログラムの成果として、留学生・国内学生双方に教育効果が上がったが、これらのプログラムは地域住民が国際社会を身近に感じる機会になった。また、結果として FD・SD 推進につながった。

②京都外国語短期大学（新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム）[4)]

【取り組みの概要】より

本学では､多様な学習者のニーズに対応するため､夜間 2 年制のキャリア英語科に改組。学生に進学・就職・留学といった卒業後の進路を明確に持たせ、その希望が達成できる教育課程としている。また、様々なライフスタイルを持つ学生に対応できるよう基礎的な学習を行った上で、学生が進路に合わせてコース選択する方式を導入。プラクティカルな英語教育やビジネススキル等の職業教育を展開する中で､新たな観光ビジネスの場面での｢ホスピタリティ英語｣の疑似体験を通して発話体験できる自律学習型教材・装置を開発した上で、働きながら学ぶ学生も経済的に安心して実習できる「有給で就労する実践型のペイドインターンシップ」と組み合わせて、キャリア支援を行う。これにより、明確な職業観だけでなく、実際の場面での英語対応能力と職業教育で学んだ知識と技能の応用力を身につけさせ、社会で即戦力となる人材育成をめざす。

③宝仙学園短期大学（特色ある大学教育支援プログラム：テーマ 1 教育過程の工夫改善を主とする取組）[5)]

【本取組の概要】より

本学では、仏教精神を基調とした「宗教的信念のある人格の養成」を教育目標とし、子供を一人の人間として理解し、慈しみ、愛し、次世代を担う人間として育てるという使命感を持った人間性豊かな保育者を養成するべく、「実践教育」「生活文化教育」「表現教育」「国際理解教育」を 4 つの柱とした教育を実現している。

『韓国保育研修』（保育学科 2 年次専門教育科目「国際理解教育」演習）は、「偏見を持たずに子供を育てることは保育者の使命であり、従って保育者は、自らこだわりのない豊かな世界観を持たなければならない」という本学の保育者養成における平和教育の基本に立ち、子供の教育、福祉について国際的視野をもつことと、平和について考えることを狙いとしている。

隣国である韓国から学び、文化と生活に触れ、韓国の人々と‘個‘として交流することにより、国際社会を考え、民族や宗教、教育等の違いを学び、平和とはどのようなことか体験的に考える機会とするため、本取組は、１９８８（昭和６３）年より継続して実施している。

(2) 海外研修の傾向の変化について

平成 20 年 9 月 29 日に開催された「2008　オーストラリア・ニュージーランド大学・短大・専門学校・高校・中学のための国際教育セミナー」における代表西村紘史氏の開会のあいさつから、以下をまとめてみた[6)]。

第一波（25 年前から 10 年間）とにかく海外へ行く、国際感覚の入り口に立つ。

第二波（1995 年から）現地の学校との交流。

・姉妹校の交流。（20 人から 30 人での修学旅行や全員で英語の勉強をするなど）

第三波（2001 年から）成果型：英検 2 級や TOEIC での高得点の取得を目指す。

・高校では中長期化する。（中長期留学を取り入れる高校が 7 年間に 4 倍）

・大学・短大では分散型へ（20 人から 30 人を 4 ないし 5 校のインターナショナルスクールへ、日本人ばかりのところでなく）

・２～３週間の思い出旅行型

第四の波（昨年くらいから）個別目的型：個人の特性や目的に合わせる。

・海外の高校・大学へ一校に一人の個人留学。

・将来の進路を見つけるために。インターシップ化。

以上のことから、近年の海外研修の傾向を知り学生や世の中の傾向を瞬時に反映していく必要も感じた。

Ⅳ．海外研修に対する学生の意識－質問紙調査とビデオ視聴後の感想から－

（1）海外研修に関する学生の意識調査

本節では、2008 年 5 月下旬から 6 月初旬に実施した海外研修に関する学生の意識調査の結果と今後の海外研修における課題を述べる。

1）調査の概要

期間：2008 年 5 月下旬～6 月初旬。

対象：本学の学生 311 名。

調査方法：質問紙調査を実施。回収率は 86.5%であった。

調査項目：フェイスシート、海外研修の希望の訪問先、海外研修に参加可能な費用、海外研修で希望する体験、海外研修の希望の滞在期間、海外研修で重視する項目、希望するコースがあれば海外研修に参加したいか、の 7 項目。

2）調査結果

調査結果は、表 3 から表 9 の通りであった。

表 3　回答者の内訳

児童障害 1 年生	84 名	31.2%
児童障害 2 年生	92 名	34.2%
地域介護 1 年生	27 名	10.0%
地域介護 2 年生	58 名	21.6%
専攻科	8 名	3.0%
合計	269 名	100.0%

表 4　海外研修の希望の訪問先

オーストラリア（ケアンズ）	44 名	16.3%
オーストラリア（ゴールドコースト）	68 名	25.2%
フィンランド（ヘルシンキ）	34 名	12.6%
デンマーク	46 名	17.0%
その他	69 名	25.6%
無回答	9 名	3.3%
合計	270 名	100.0%

＊複数回答した者あり

表 5　海外研修に参加可能な費用

20-25 万円	190 名	70.6%
25-30 万円	27 名	10.0%
30-35 万円	4 名	1.5%
35-40 万円	0 名	0.0%
40-50 万円	1 名	0.4%
興味のある・充実した内容だったら金額は関係ない	10 名	3.7%
その他	30 名	11.2%
無回答	7 名	2.6%
合計	269 名	100.0%

表 6　海外研修で希望する体験

施設訪問	154 名	57.2%
子どもたちや利用者との交流	178 名	66.2%
現地の福祉制度に関する講義	51 名	19.0%
観光	214 名	79.6%
市内の自由行動	171 名	63.6%
ホームステイ	99 名	36.8%
語学研修	39 名	14.5%
その他	6 名	2.2%

＊複数回答

表 7　希望の滞在期間

4 泊 6 日	93 名	34.6%
6 泊 8 日	87 名	32.3%
2 週間	44 名	16.4%
内容によって期間は問わない	39 名	14.5%
その他	4 名	1.5%
無回答	2 名	0.7%
合計	269 名	100.0%

表 8　重視する項目

訪問先	33 名	12.3%
費用	165 名	61.3%
体験	61 名	22.7%
日程	15 名	5.6%
無回答	2 名	0.7%

＊複数回答

表 9　希望のコースがあれば海外研修に参加したいか

はい	180 名	66.9%
いいえ	88 名	32.7%
無回答	1 名	0.4%
合計	269 名	100.0%

3）結果の概要

本調査は、本学学生の海外研修に対する意識を探ることと同時に、2009 年度の海外研修の訪問先を決めることを意図して企画されたものである。そのため、海外研修の希望の訪問先は、国際交流委員会において、今年度の海外研修の訪問先として候補に挙がったものである。以上を踏まえて、結果を概観する。

訪問先として人気の欧米

海外研修の希望の訪問先として最も人気があったのは、オーストラリアのゴールドコーストで、25.2%であった（表 2)。「その他」としては、アメリカ 14 名、フランス 9 名、イタリア 7 名、スウェーデン 7 名と、欧米が希望の訪問先として挙げられた。

できるだけ安い費用で交流と観光を求める傾向

どのくらいの費用なら参加したいかを尋ねたところ、最も多かったのは、「20 万円～25 万円」であった（表 3)。本調査では、海外研修が実施可能な下限の費用として、項目を 20 万円から設定した。そのため、海外研修にかける費用として、「20 万円～25 万円」の余裕があるというよりも、海外研修にかける費用はできるだけ少なくしたいとの意向を反映して、選択肢の中で最も金額の少ない「20 万円～25 万円」が選択されたと考えられる。そのことを裏付けるように、その他では、「できるだけ安く」という記述が多く見られた。一方、「興味のある・充実した内容だったら金額は関係ない」と回答する者も 10 名いた。このような学生に、興味の持てる充実した内容の海外研修を提案していくことも重要であると思われる。

海外研修で希望する体験としては、「観光」を挙げる者が最も多く、79.6%であった（表

4)。次に多かったのが、「子どもたちや利用者との交流」で 66.2%、次いで「市内の自由行動」が 63.6%であった（表 4)。このことから、本学の学生は、海外研修を「観光」の一環として位置付けているとともに、「子どもたちや利用者との交流」体験を希望していると考えられる。

希望滞在期間としては、「4 泊 6 日」が最も多く、34.6%であった（表 5)。また、「6 泊 8 日」とあわせて 1 週間前後を希望する者が 66.9%であった（表 5)。これも、海外研修の費用と関連していると考えられる。できるだけ安い費用で海外研修に参加したいという意識が表れているといえる。一方で、ここでも「内容によって期間は問わない」という者が 14.5%いた（表 5)。このことから、海外研修の内容を学生にとって魅力あるものにし、充実させていたくことの重要性が再確認される。

海外研修に参加するにあたって重視する項目を尋ねたところ、「費用」を重視する者の数が圧倒的に多く 61.3%であった（表 6)。次いで、「体験」が 22.7%であった（表 6)。

海外研修に対する潜在的ニーズ

最後に、希望のコースがあれば海外研修に参加したいかという質問は、学生の海外研修に対する潜在的なニーズに焦点を当てたものである。ここでは、「はい」と答えた者が、66.9%であり、「いいえ」と回答した 32.7%を大きく上回った（表 7)。

表 6 と表 7 から、学生にとって、海外研修に参加したいという希望はあるものの、費用の面からなかなか参加することが難しい状況にあることが示唆される。

4）今後の海外研修に関する課題

今回の調査から、本学の学生は、海外研修に参加してみたいという、潜在的なニーズはあるものの、費用の面から実際の参加には至らないという現状が浮かび上がってきた。一方で、表 3 や表 5 から、充実した内容であれば費用や滞在期間に関係なく参加したいという学生の意見も、少数ではあるが確認することができた。

そこで、本学における海外研修の今後の課題として、少人数でも実施可能な海外研修のプログラムを設定することが挙げられる。本学の海外研修は、現在、ある一定の人数が集まらなければ実施することができない仕組みとなっている。そこで今後は、少人数でも実施可能な海外研修のあり方を検討する必要がある。同時に、表 4 から明らかになったように、現地の子どもたちや利用者の方たちと交流できるような「体験」を充実させ、学生にとってより魅力的な海外研修を企画していくことも求められる。

（2）植草幼児教育専門学校第 16 回平成 15 年（2003）の修学旅行ビデオを視聴して

1）調査の概要

日時：1 年；平成 20 年 7 月 29 日
　　2 年；平成 20 年 10 月 3 日

対象：児童障害福祉専攻 1 年 88 名、2 年 93 名

調査方法：感想文記述式

2）ビデオ視聴後の感想

表 10　1 年生の感想

・言葉が通じなくても、まず自分が楽しむことが大切。
・笑顔とジェスチャーが大事。
・保育環境の違い
・保育方法の違い
・日本文化の伝承
・英語力の向上
・今後の実習の参考になった。
・海外の保育にも目が向けられた。
・海外研修に行きたくなった。
・先輩の夢の実現がすごい。

表 11　2 年生の感想

・子どもの笑顔は、万国共通である。
・笑顔の大切さ。
・誉めることの大切さ。
・表現力を豊かにしたいと思った。
・コミュニケーションの取り方
・保育環境の違い
・カラフルさ
・自由
・個人が尊重されている。
・文化交流の大切さ。
・他国の保育に関心を持った。

3）1 年生と 2 年生の感想にみる捉え方の違い

今回、研修旅行のＰＲも兼ね、植草幼児教育専門学校の海外における修学旅行のビデオを視聴した。第 16 回平成 15 年（2003）のビデオは、藤国際幼稚園における訪問の様子が一番分かりやすいことに加えて、Ｆさんが学生時代に訪れ、夢を実際に実現したという２点から数あるビデオ記録の中から選んだ。

まず、ほとんどの学生が他国の幼稚園の様子を観たのは初めてであろう。特に、１年生は保育の現場経験がなく観るもの全てが新鮮で、保育環境や子どもたちとの関わりに目を奪われ、今後の実習に向けて参考にしている。このような形で海外研修をしたいという期待や今回は、経済的な理由で参加出来なくても、将来の夢として膨らんできた学生も多い。また、２年生は数々の実習体験後、就職活動の最中であり自分自身に照らし合わせ、他国の保育にも関心を持ち保育者として資質の向上を目指していかなければならないと感じている。一方、海外研修に参加するということは、３月という時期で現実には至らない。

しかし、今回のヒデオ視聴は、改めて国際感覚に目覚めるという観点からも意義があった。さらに、学園の卒業生が初志を貫徹している様は、等身大の自分に置き換え身近に感じることが出来た。卒業生の貴重な体験談は、今後後輩たちの道しるべとなるであろう。

Ⅴ．今後の課題と展望

これまで、植草学園短期大学における海外研修と植草幼児教育専門学校における海外修学旅行の変遷、他短大や海外研修を手掛ける交流センターなどにおける国際交流の状況、現在の学生の海外研修に対する意識調査の結果を述べてきた。以上を踏まえて、本学における海外研修の課題を次のようにまとめることができる。

植草学園短期大学の海外研修、植草幼児教育専門学校の海外修学旅行の両者は、理事長の国際感覚を身につけた教育者の育成、また国際化に対応できる人材の育成とい

う強い思いから始まっている。今後、その思いをいかに受け継ぎ、具現化していくかが課題である。具体的には海外研修を実施可能にする仕組みづくりが必要である。学生の意識調査から、多くの学生は海外研修への参加希望を持っているものの、費用の面から参加に至らないという状況にある。一方で、費用や期間に関わりなく、魅力的で充実した海外研修であれば参加したいという学生も少数ではあるが存在する。そこで、希望者が少数であっても実施可能な海外研修の仕組みを作っていくことが求められる。

また、他短大や最近の海外研修のあり方の変化などを見ると、教育関係では、「教育理念」と国際交流活動との強い相関がわかる。国際交流の在り方も個性的であり、現実の学生のニーズを十分にとらえた工夫が凝らされている。そして、「集団から個」へ、インターシップより経験や体験を通した研修のあり方へと変化してきている。さらに、千葉県内だけを見ても「国際化・居住外国人が多い」という地域的な特性を生かした国際交流の在り方の検討も必要になってきている。

最後に、海外研修の今後の展望を述べる。海外研修委員会から国際交流委員会へと名称が変更したことを踏まえて、海外に赴いて、異文化に触れることを目的とした海外研修中心の活動から、日本の中の国際化に目を向けていくという視点を入れることが考えられる。そのために、国際交流委員会の年間活動の中に、海外で活躍する講師や日本国内で国際的活動をしている講師を招聘して講演会を企画するなど、学校の中で学生が国際化の現状を学ぶ機会を位置づけていくことが重要になると考えられる。先に述べたように、卒業生の中には、在学中の海外修学旅行を契機に、自身のキャリアを日本だけでなく海外においても築く者が生まれている。このような卒業生の体験を在学生に伝えることも、在学生が国際化の現状に目を向ける刺激となると考えられる。

参考・引用文献

1）海外研修報告書（第 1 回～第 6 回），植草学園短期大学，2001～2007
2）学校法人植草学園創立 100 周年記念事業実行委員会記念誌編集委員会，2005，植草学園 100 年のあゆみ，株式会社アイガー，126-127
3）京都経済短期大学，地域の中で世界を感じる－異文化・異世代交流を通じた留学生の活躍に向けて－，短期大学教育，第 64 号，190-191，2008
4）京都外国語短期大学，即戦力となる人材育成のための学生支援－観光ビジネスにおける「学び」と「実践」のコラボレーション，短期大学教育，第 64 号，188-189，2008
5）宝仙学園短期大学，保育者養成における平和教育－韓国保育研修，短期大学教育，第 64 号，130-131，2008
6）OKC オセアニア交流センター，「2008 オーストラリア・ニュージーランド　大学・短大・専門学校・高校・中学のための国際交流セミナー」資料，2008